

『エリート王子が専属ご指名 ～愛されシェフの幸せレシピ～』

著：高月まつり

ill：相葉キョウコ

陽登はシェフジャケットと帽子をつけたまま、ビュッフェテーブルの一番端に目立たないように立つ。もし料理が足りなくなったらいつでも追加を指示できるように。

弦楽器の心地よい生演奏が流れる中、来客たちがグラス片手に料理を口にする。

「とっても美味しい」

そう言って、すぐに二つ目を口に入れる女性たち。

「食べやすいわ」「あら美味しい」「あなたも食べてみて」と、さざ波のような声に聞き耳を立てて心の中で拳を振り上げる。

グラス片手に談笑する男女の間をすり抜けるようにして、小さな子供が皿を両手に持って陽登の元に駆け寄った。ブレザーにリボンタイ、半ズボンのよそ行きを着ている。

子供はここに来たまではよかったが、それからどうしていいかわからずにモジモジと足踏みをした。

「どうしたのかな？」と声をかけたら、両手に持った皿で自分の顔を隠した。人混みに慣れていないのか、もしくは人見知りなのか。

子供はまだ何も言わずにモジモジしている。

「こんにちは。僕はきょうの料理を作ったシェフです。食べたいものがあるんですか？」

視線を合わせるように腰を屈めて、優しい声で尋ねてみた。

すると子供はようやく皿を顔から離し、頬を染めて「こんにちは」と言った。

「こんにちは。あの……………僕もご飯を、食べていいですか？」

ようやく喋ってくれた。

ここに盛ってくれと皿を出す仕草が可愛いが、まず、聞かなければならないことがあった。

「もちろん。でもその前に、一緒に来た大人に、何を食べても平気か聞いてくれますか？」

「あの、僕、アレルギーないです。なんでも食べられます。…………なんでも食べられるので、連れてきてもらいました」

はにかむ顔が可愛い。

しかし、保護者の承諾なしに子供に勝手に料理を食べさせることはできない。

「ごめんね。一緒に来た人を連れてきてくれるかな？ 僕はここで君を待ってます」

「……………分かりました。本当に、待っててくださいね？ そのチョコレートケーキ、まだいっぱいありますか？」

「いっぱいあるよ。安心して」

その言葉を聞いた少年は頬を染めて小さく頷き、皿を持ったまま人混みの中に入って行き、す

ぐに男性を連れて戻ってきた。

「はい！ 一緒に来た人、ですっ！ なんでも食べていって言って！ 拓実ちゃん！」

「え？ あ、ああ、はい。この子はなんのアレルギーもない。好きなものを好きなだけ食べさせてやっていただけますか？ 私はこの子の保護者で、阿井川拓実と言います。このパーティーの主催です」

いきなり連れてこられて慌てた男は、すぐにアレルギーの話だと理解したらしい。

今度は陽登が面食らった。

輝く太陽のかけらが降ってきたのかと何度も瞬きした。

テレビで見た以上だ。

どこかの国の王子様かと思った。いやある意味王子様だろう。有名グループの一族の一人だ。

陽登は心の中で自分に「俺は夢見る女子か！」と突っ込みを入れた。それほど、子供が連れてきた実際の阿井川拓実は笑顔がまぶしく美しい「王子様」だった。スーツじゃなくてマントを羽織って白馬に乗ってほしかった。

「そうですか。よかった。じゃあ何が食べたい？ お皿にのせてあげるよ？」

動揺を必死で隠して、少年に話しかける。

「僕は阿井川聡です。小学二年生です。チョコレートケーキと、エビと、お肉をください」

さっきまでおどおどしていた子供が、今は笑顔で皿を差し出してリクエストをする。それを見ている拓実も「美味しそうでよかったね」と言って微笑んでいる。

陽登は彼らの笑顔に釣られた。

「はい聡君。まずは一つずつね。おかわりできるから」

皿にケーキや食べ物を盛って渡してやると、聡は目を輝かせてありがとうと言った。

彼は「拓実ちゃん、僕、向こうで食べてくるね！」と言ってソファに向かって歩いて行く。

「子供のアレルギーを気にしてくれてありがとう。思っていたよりマトモなシェフで、私も安心したよ」

爽やかな笑顔の王子が、聡が離れた途端に笑顔のままトゲのある言い方になった。

笑みを浮かべているのに陽登への視線が冷ややかで痛い。体にちくちく突き刺さる。なんでそんな視線を向けられるのか分からないが、華やかな場所で言い争いなどできないので、笑顔で言い返すしかない。

「アレルギーを気にするのは当然です」

そんなことも知らないのかという気持ちを込めて、胸を張って言い返した。

「ああ、そうですよね。君が、どこの馬の骨とも分からない、シェフという肩書きだけを付けた人間であるわけないですもんね。ふふ」

おいおい、言ってくれるじゃないか……っ！

キラキラと輝く笑みを浮かべ、柔らかな口調で言うが、彼の口から出てくる言葉はウニのようにトゲだらけだ。

「そちらこそ、パーティー前に一度ぐらいはお会いしたかったです。大事なパーティーなのに、事前の打ち合わせに責任者の方が一度も顔を見せないこともあるんですね」

笑顔には笑顔で、そしてトゲにはトゲで。

すると拓実はばつの悪そうな顔をして「本当に忙しかったんです」と言った。

いきなりしょんぼりした顔を見せられたので、俺も言い過ぎたかと謝罪しようとしたが、彼が「私が打ち合わせに来ていたら、シェフの決定までスタッフに任せることはなかっただろうに。いえ、あなたが素晴らしいというわけではないんですけど」と言ったので、謝罪しようという気持ちは吹っ飛んだ。

「本当なら聡には名の通った有名店の料理を食べさせたかったのですが、パーティーを楽しみにしていたのに何も食べるなは可哀相でしょう？ あの子のために私は全力でなんでもしてやりたいんです」

「はあ……」

なんで俺がこんな嫌みを言われなくちゃならないんだ？ 俺に依頼したのはそちらでしょうが。責任者ならその時点でチェックしろよ。おい。

陽登は曖昧に同意し、彼が早くこの場を立ち去ってくれることを願った。

「シェフだけでなくパティシエやショコラティエも呼んで、もっとこう……華やかにしたかったんですけどね、まあ、こういうこともあります。次回に期待ということで」

自分を見ながらため息をつく男にカチンときた。

たしかに自分に知名度は全くないが、だからといっていい加減な仕事をした覚えはない。むしろ、ちゃんと働けば名前を覚えてもらって次に繋がると信じている。

どこにでもクレームを付けたがる人間はいる。自分もいろいろなものを見てきただろうと心の中で呟いて、一呼吸置いて口を開いた。

「私の作ったものを食べた上での感想なら甘んじて受け入れますが、食べずに仰っているのですしたら、まずどうか召し上がってみてください」

「なんで私が？」

彼は体全体で「嫌だ」を醸し出している。これは是非とも食べていただかなくては。

「聡君や他のお客様は食べてくださってます。お客様に出しているものを主催のあなたが口にしていなくてよろしいのですか？」

陽登は人なつこい笑顔でそう言って、皿に料理を盛っていく。皮をカリカリに焼いて甘辛いソースを絡めた鴨、リガトーニというショートパスタにリコッタチーズを入れてフリットにした、食感がクリームコロッケに似たもの、ハーブをたっぷり入れた中東風の粗挽きソーセージの三品。そこに、聡が瞳を輝かせていたチョコレーケーキを添えた。

「どうぞ」

端から見れば、シェフが親切に料理をサーブしているようにしか見えない。

過去最高の笑顔を見せて、陽登は拓実に「はいどうぞ」と皿にフォークものをせた。

「そんなわざわざ申し訳ないです」

騒ぎにしたくないのは彼も同じのはずだ。

拓実が仕方なさそうに料理を口に入れた。

最初は皮がカリカリの鴨だ。

嫌々口に入れた拓実が、ぴたりと動きを止めて、すぐに二つ目の鴨肉を口に入れた。それから皿に盛られた他の料理にも手を出す。

陽登はニヤニヤしたいのを堪えて、皿が空になるのを見ていた。

そこへ聡が「おかわりください！」と笑顔で戻ってくる。

「とても美味しかったです！いつものお弁当より美味しい！すばらしい……と言うんですよね？」

「お弁当？」

「はい。レートーデリバリーっていう、カチコチのお弁当。温めると美味しいけど、先生のご飯の方がもっと美味しいです！拓実ちゃんも食べた？凄く美味しいよね？」

聡の問いかけに、拓実は「凄く美味しかったよ。凄いシェフだね」と答える。さっきまでぶつぶつと文句を言っていたのに、よくも笑顔で言えたものだ。

「それはよかった」

陽登は、今度の皿には肉類だけでなくサラダものせてやった。デザートは桃のムースだ。

聡は「きゃー！」と喜んで、ごちそうののった皿を両手で持って再びソファに戻る。

「子供には大人気だね、君の料理は」

「女性にも人気ですよ。よく見てください」

「女性は可愛いものは大体なんでも好きだよ。ははは」

「そうですか？私の料理はどうでしたか？」

すると男は一瞬言葉に詰まって「よくある味だ……まあまあだな」とそっぽを向いて言った。素直じゃないなと笑いがこみ上げてくる。

「何を笑っている」

「いえ別に。……その、余計なお世話だとは思いますが……さっきの聡君の言葉で思ったんです。冷凍食品ばかりではなく、ハウスキーパーを雇って家事をしてもらってははどうでしょう？よかったら腕のいいハウスキーパーをご紹介しますよ？」

きっと、いろいろとこだわりのありそうなこの男なら、一流のハウスキーパーを雇用するだろう。そうすればあの子供の食生活も改善されるに違いない。

だが拓実は眉間に皺を寄せて「できるものならとうにやっている」と言い返してきた。

「え？」

「そもそもあなたには関係のないことです。人の家庭に口を挟まれても困ります。……まったく、素性の知れない人が来てしまうと、とんだハプニングが起きるものですね」

「プライベートに口を挟んだことについては謝罪しますが、それ以外はあなたも大概失礼ですよ。言われたことはありませんか？」

笑顔で言ってやった……っ！

……が、言ってから「あ、失敗した。俺にオファーをくれた担当さん、大変申し訳ない！」と頭を抱えた。

相手の右眉が上がったのに気づく。

だがそこに再度聡がやってきて、今度は「先生！僕のおうちでご飯を作ってください！」と

頬を染めて言った。

「待ちなさい、聡。この方にはお仕事があるんだよ？」

「僕のお小遣いでお願いします」

健気なことを言われると心が揺れる。

だが陽登の「出張料」は子供の小遣いでまかなえるものではない。

「聡。聞き分けて」

すると聡は目に涙をこんもりとためて、とぼとぼと出口に向かって歩き始めた。

「え？ ちょ、放っておいていいんですか？ 子供を一人で帰らせたらダメですよ」

「秘書がいるから問題ありません。……しかし、名もなきシェフの味がそんなに気に入ったとは、あの子も面白いです」

「息子さんのお願いぐらい聞いてやってもいいと思いますが……と言うのも、プライベートに口を出すことになりませぬ、すみません、どこの誰とも知れないシェフで」

「息子じゃない」

「はい？」

拓実は口が滑ったという表情を浮かべて「だから、人の家庭に口を挟むな」と小さな声で言い放ってその場を離れた。

その後、パーティー自体は無事に終了し、向こうの担当者からも「噂通りとても美味しかったです！ お客様には日野田さんのウェブサイトをご案内させていただきました」と称賛されただけでなく宣伝までしてもらった。

結果的にはよかった。

だが、あの二人の「出張シェフを雇いたい」「聞き分けろ」という最後のやりとりと聡の悲しそうな顔が、今も心の隅にずっと残っていた。

限られた空間なので、ダイニングテーブルは仕事用のデスクと兼用になっている。

コーヒーを淹れたマグカップを左に置き、ノートパソコンを立ち上げてスケジューラーを起動させた。

陽登は、「シェフ日野田」という名の、シンプル且つおしゃれで分かりやすいウェブサイトを作って予約を取っている。

軌道に乗るまでは、友人たちにサイト作りを手伝ってもらったり動画配信サイトで料理中継をしたりと大変だったが、現在は生活に困ることはなくなった。

パーティー用の料理から家庭の作り置きまでなんでもこなす、なかなかの人気シェフだ。

今では予約開始から三十分で向こう三ヶ月の殆どが埋まる。

「あー……一件キャンセルか」

おととい、八月から十月いっぱいまでの予約を開始した。

キャンセルしてきたのは初めての予約のお客様で、一般家庭での出張調理だった。こういうことはたまにある。だが当日キャンセルでないだけありがたい。

酷いのが、出張調理にもかかわらず何の連絡もなしに当日留守という家庭だ。ウェブ予約を始めた頃に何度かこれに当たった陽登は、うんざりしながら「半額前金払い。キャンセルの場合は手数料を引いてお返しします。当日キャンセルは返金いたしません」というシステムを作って対処した。

先にお金を取るなんて……という予約者も多く一時は客足が遠のいたが、結果として正解だった。

陽登の料理を食べた人間の殆どが、次回の予約も入れてくれるので常連が増えた。

「今週の金曜日の午後五時からが空いたな。とりあえず、予約可にしておくか」

カタカタとキーを操作して、月間スケジュールの調整を行う。金曜午後五時からの欄を×から○にして更新する。

すると一分も経たないうちに予約が入った。

リロードして待ってたのか？ 俺ってモテモテだな……なんてことを思ってニヤつきながら予約者名を見たら、「阿井川拓実」だった。

「は？ マジか？ え？」

もしこの予約者が本当に、あの男だとしても、仕事はする。そりゃもう完璧にしてやるよ！俺は仕事と私怨は一緒にしませんから。それがプロですから！

いつも通り、まずは丁寧な予約のお礼と確認事項のメールを打って送信する。

すると、五分もしないうちに返事が来た。

『ようやく予約が取れて、とても嬉しく思っています。こちらこそよろしく願いいたします。料理のリクエストはありません。日野田さんの料理なら何を食べても美味しいと思います。ああでも、できれば魚を食べたいと思っています』

ずいぶんと嬉しいメールだ。滅茶苦茶期待されている。

そしてメールの文面から、同姓同名の別人説が濃厚になった。

あの阿井川拓実だったら、こんな内容のメールを送ってくるはずがない。もっと文章は硬く、用件のみだと思う。先入観がガッツリ入っているが、陽登はそう思った。

予約者登録欄に年齢が書いていなかったが、魚料理をリクエストしてくる辺り、ある程度の年齢はいつてそうな予感がした。

「この人の家に行くの……楽しみだな」

陽登はそう言って、今日の午後に向かう家庭に気持ちを切り替える。

「日野田さんの作った料理だと、椎茸やニンジンが入っていても美味しいって食べてくれるのよ。嬉しいやら悔しいやら。最近、自分でも料理を作りたいって言い出してね。料理のできる男子はモテるわよって言い続けた甲斐があった」

豪快に笑い、家事も仕事もパワフルにこなす母親と、大人しい中二男子の家庭だが、出張シェフを始めた頃からの常連で、陽登の方も接客に関していろいろと勉強することがあった。

料理ができてモテたことはないが、それでも「お前の作る飯は旨い」と友人たちが言ってくれるのは嬉しかった。

中二男子にもそういう友人がいるといいなと思いながら「とりあえず椎茸料理だな」と呟く。

今は目の前のことに集中する。

阿井川拓実なんて名前は、頭の隅に力任せに押しやった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>